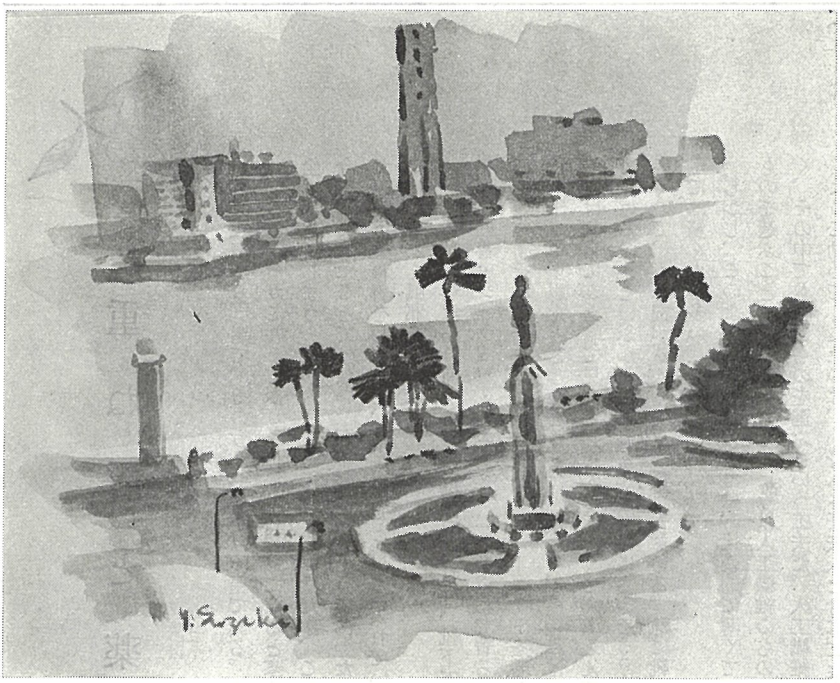


ヨーロッパの旅より

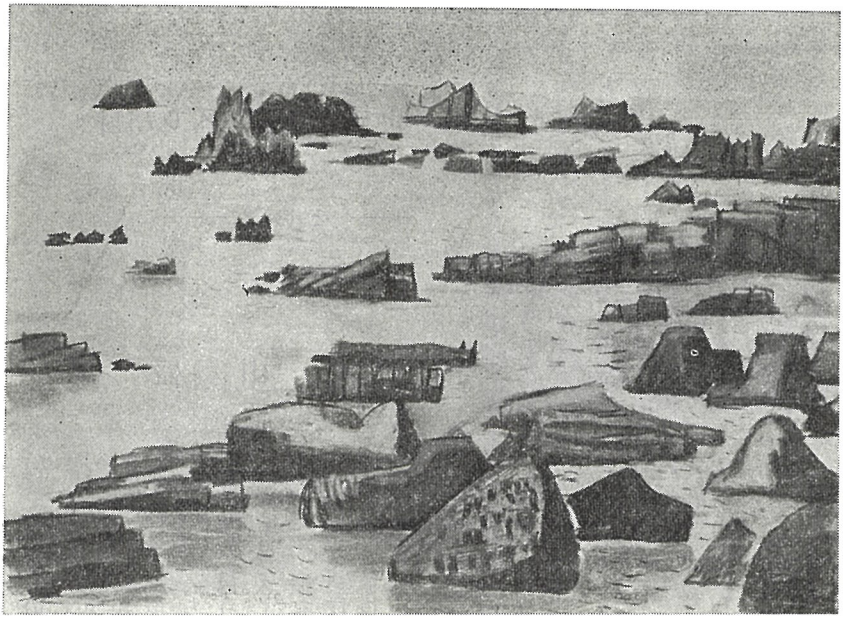
えと文
鈴木泰正

エヂプト、クレータ、ギリシヤ、南イタリヤ、スペインの各地は、北欧に比べて、その風土、風俗からくる旅の味は深かった。カイロを流れるナイルの河幅は想像外に狭く、両岸の美しい公園の中に、近代的ホテルが林立する景色は想像のナイルに遠かった。朝五時に起きてホテルの九階のベランダから夜明けのナイルをスケッチした。次第に明けて来るナイルは、うす紫の砂漠の街を白銀色に流れて、未だ眠る岸辺の椰子の木が火面にシルエットを落して、やっとナイルの昔の面影をしめしてくれた。

カイロ美術館は、さながらピラミッドの中に引き込まれたように巨石のうすくらがりの中に太古の神々や王族の巨体がおびただしいミイラや装身具と共に永遠に目をむいたまま眠っているようであった。

ギリシヤの明るくスマートな古代遺跡とは全く異った対称をなして地中海をはさんでいた。

（女子中・高教諭、美術）



えと文

中西文彦

男鹿半島のスケッチ

秋田駅より広々とした田んぼの中に、石油の原油をくみ上げるポンプや、やぐらを見ながら一時間、東北の旅六日目に二つの火山（寒風山・真山本山）と八郎潟の干拓で知られている男鹿半島にやって来た。

国鉄男鹿駅で下車したゴムぞうりにGパン姿の私は、ガタガタバスにゆられて、石油の胸のわるくなるようなニオイの町をこえて、ようやく海岸線の見えるところまでやって来た。前々日は下北半島の先端まで行く途中で大雨にあって、ずぶぬれでひき返し、前日の十和田湖ではしとしとと梅雨のような雨にあって、終日、観光バスと汽車の中に坐っていたことを思うと、うそのように晴れわたった空を見るのは本当にうれしいことであった。すいこまれそうな空のブルーと海のブルー、その海の中に海岸から荒々しい男性性な大小さまざまの岩が、点々とまきちらばされたように続いているのは、ちょっと普通の海では見られないおもしろさである。そのうち、あたりで一番高い岩の上に、位置をしめて、自分が旅行者であることも忘れて、スケッチしたことであった。

（商高講師・美術）